

「鬼門除け」に見られる京都の魔除け習俗の研究

—「田の字地区」実地調査を事例として—

藤野正弘

◇はじめに

京都の町なかを歩いてみると、至る所で「鬼門除け」を見ることができる。それは昔ながらの町家の一角に留まらず、マンションや近代的なビルに施されていることもある。また、その形態は、角を削った本格的なものや白砂を敷いた角、あるいは南天や柊を植えたものまでさまざまである。

「鬼門」という考え方は、古代中国よりもたらされたといわれ、艮の方角（北東）は鬼が出入りする場所として嫌われていた。艮の方角を表鬼門とし、その対角線である坤の方角（南西）を裏鬼門として忌み嫌う風習は平安京造営時にも取り入れられたといわれている。すなわち、国家鎮護のため、北東の比叡山に延暦寺を、南西に石清水八幡宮を配したのも、この考え方の表れである。古代から中世、近世に至るまで、この風習（あるいは土俗信仰）が、広く浸透していたことと推測できる。その中で、京都の一般庶民の生活に今なお根付いていることの背景を探る（なぜ他都市では廃れてしまったか）。特に、伝統的な京町家のみならず、新築町家や近代的なマンション、ビルにも鬼門除けを施すことの意味を、フィールド調査を通して明らかにしたい。

◇先行研究

「鬼」に関する研究が多数存在するのに比べて、「鬼門」に関する先行研究は少ない。筆者が調べた限りでは「鬼門」だけを取り上げた文献は見当たらず、

雑誌の特集で散見しただけである。⁽¹⁾

そこで関連がありそうな分野の文献から調べることにした。

(1) 建築学から見た「鬼門」

①『日本の町並調査報告書集成』(2008)では、調査項目にすら入っていない。
関連する主な調査項目：門、塀、屋根、ストリートファニチャー（石標、犬
矢来、植物）辻、セットバック、空き地

・同書「近畿地方の町並（湯浅町、五條市新町、大字陀町、篠山、出石、伏見）」
項では、平面図や文中にも「鬼門」の記述はない。

②『日本の民家調査報告集成』(1998)では、調査項目に入っていない。

③『日本民家語彙集解』（日本建築学会民家語彙集解部会・1985）

キモン：「敷地や家屋のこの隅を欠いたりして鬼門除けとすることも多い」

(2) 民俗学から見た「鬼門」

①『日本民俗大辞典』（1999）

「鬼門」の項：「鬼門の災禍を防ぐため」－鬼門除けの祠、桃などの植樹、方違。

②『精選日本民俗辞典』では、独立した「鬼門」の項はなく「家相」、「恵方」、
「方位」、「厄」の項にそれぞれ少しずつ記述あり。

③『日本民俗語大辞典』（石上堅・1983）には独立した「鬼門」の項があり、
その中に「鬼門除け」の記述がある。

④『日本民俗資料事典』（文化庁文化財保護部・1969）には、「（前略）鬼門除
けの方法や呪具にも注意しなければならない」との記述あり。

⑤『風水と家相の歴史』（宮内貴久・2009）では、「鬼門」に関する記述も多
いが、「鬼門除け」という言葉は1か所しか記述がなかった。

(3) 民俗建築学から見た「鬼門」

①『日本の民俗第5巻家の民俗文化誌』（2008）

「風水・家相との関連」の項：「鬼門－家を建てる時に配慮する」

②民俗建築大辞典（2001）

「方位」の項：「地相、家相上最も嫌われるのは鬼門・裏鬼門の出張りである

ことに北東隅の「艮」は人為的に欠くことさえ行われる。」

[民家と境界]の項：「垣根」、「塀・石垣」、「門」、「玄関」、「庇」の小項目があるが、鬼門に関する記述はない。

(4) 古地図に見る「鬼門」

京都を中心に多くの平面図⁽²⁾で確認したが、京都御所や仏光寺以外で鬼門の「欠け」を確認することはできなかった。

1. 鬼とは

そもそも鬼とはいったい何なのか？これを正面から論じるのがこの研究の主題ではないので、以下参考文献をもとに結論だけを記す。古代中国では、北方騎馬民族による侵略、略奪が脅威となり、人知の及ばないものを鬼として恐れるようになった。日本では出雲国風土記の「田を耕す農民を食う鬼」が文書に表れた最古の記録で、自分たちの生活を脅かすものを鬼と呼んだ。平安時代には蝦夷が脅威であり、貴族社会とは異質の人間を鬼とみなした。盗賊であった大江山の酒吞童子がその代表的なものである。枕草子に「名おそろしきもの」として牛鬼が出てくるが、平安時代には鬼の侵入を防ぐ道饗祭や四角四境祭が盛んに行われた。また、疫病のように人の生命を脅かす目に見えぬものを鬼として恐れたという説もある。

2. 鬼門とは

「鬼門」という考え方は、古代中国よりもたらされたといわれ、艮の方角から鬼が出入りする場所として嫌われていた。『日本民俗学辞典』（中山太郎・1933）には、「東北の隅を鬼門といふのは、神異経、隋書に見える」とある。艮の方角（北東）を表鬼門とし、その対角線である坤の方角（南西）を裏鬼門として忌み嫌う風習は平安京造営の時にも取り入れられたことは前述した。また、それ以前の日本書紀には風水に関する記述があり、平安時代に盛んに

なった陰陽道とともに、貴族間に鬼門の考え方が浸透していった。このような都市としての鬼門対策とは別に、個々の邸宅や住居でも鬼門から鬼が入ってこないようにと前述のような対策を講じた。代表的なものとして京都御所北東の猿が辻を挙げることができる。北東の角に雀みを入れ、角をなくすことにより、鬼を封じようとしているのである。



またこのような考え方は平安京にとどまらず、鎌倉幕府や江戸幕府開城の際も用いられ、上野寛永寺が江戸城の表鬼門の備えとして作られたことが知られている。古代から中世、近世に至るまで、この風習（あるいは土俗信仰）が、広く浸透していたことと推測される。中世以降陰陽道は庶民層にも流布し、近世になると風水から家相の考え方が広まっていった。

現代でも家を建てる時には方位を意識し、鬼門の方角には不浄物（便所や流し）などを置いてはいけないという考え方が定着している。高嶋易団に代表される暦や神社における方除けにもその流れを見て取れる。

3. 鬼門除けとは

鬼門は鬼の侵入口であるとされ、鬼が入ってこないように様々な工夫を施している。その形態は、角を削った本格的なものや白砂を敷いた角、あるいは南天や柵を植えたものまでさまざまである。京都御所北東の猿が辻が代表的であるが、一般庶民の家のみならず近代的なビルやマンションでも施工例を見ることができる。

「鬼門除け」に定着した呼称はなく、鬼門封じという文献もあるが、鬼門除けが一般的であると思われるので、拙稿では「鬼門除け」に統一する。

前掲の日本民俗語大辞典によれば、鬼門の場所に鬼門除けとして、以下の

ことを行うとしている。

○鬼瓦や大津絵風の鬼絵・像を置く

○梅・桃・梨・槐を植えたり、植え込みにしたりする

○稲荷祠・祝殿を設ける

また、『民間信仰辞典』（桜井徳太郎・1980）では、「鬼門除けに、稲荷神を祀る、屋根に鬼瓦をつける、梅、槐を植えるなどする。」としている。



4. 京都における「鬼門除け」の分布～田の字地区内調査結果

京都市内中心部の俗に言われる「田の字地区」内のすべての建築物を⁽³⁾実地検証し、鬼門除けの設置状況を調査した。

その結果は次の通りである。

(1) 形状

①角を欠く ②四角で囲む ③樹木を植える ④植木鉢を置く

⑤①から④の複合 ⑥その他

(2) 設置主体

①民家（木造・ビル）②店舗（木造・ビル）③事務所（木造・ビル）

④マンション ⑤寺社 ⑥その他（駐車場・学校など）

5. 「鬼門除け」設置者ヒアリング調査結果

実地調査で確認した鬼門除けの中から、4-(2)で分類した設置主体の代表的と思われる事例に対して、個別ヒアリング調査を行った。

その結果は大別すると以下のとおりである。

・A家（平成20年代・木造民家）形状：四角で囲んだ中に玉砂利を敷く

- 鬼門除けの発案者は施主であり、その意味は以前より知っていた
 設置理由：以前から知っていたうえ、改めて占い師に見てもらった
 この家では、表からは見えない敷地の東北の角にも設置してあった。
- ・ B 店舗（平成 20 年代・ビル） 形状：四角で囲んだ中に玉砂利を敷く
 設置理由：建築会社の設計に従った
 - ・ C 店舗（平成元年代・ビル） 形状：四角で囲んだ中に砂を敷く
 設置理由：立て替える前にも存在していたので、そのまま踏襲した
 - ・ D 事務所（平成元年・ビル） 形状：円で囲んだ中に砂を敷く
 設置理由：昔（親の代）からそう決まっていた
 - ・ E 店舗（平成元年代・ビル） 形状：植木鉢（南天）
 設置理由：意味は知らなかったが、地元の人に教えて貰い設置した
 - ・ F 店舗（昭和 60 年代・ビル） 形状：四角で囲んだ中に玉砂利を敷く
 鬼門除けの発案者は施主であり、その意味は以前より知っていた
 設置理由：先代の指示による
 - ・ G 建築会社：B を設計、建築
 京都の施主は鬼門を気にする人が多く、設計の段階から確認している。
 その意向を踏まえて建築するが、鬼門除けを設置する施主の割合が多い
 ように思う。
 - ・ H 住宅販売：建売住宅に鬼門除けを施工
 該当物件に限らず、ずいぶん昔から鬼門除けを施工している。確たる根
 拠があって施工していると云うより、昔からそうだし、無いよりあった
 方がいいからと云うようなことで施工している。



商業ビル



銀行店舗



事務所



コインパーキング

6. 考察

(1) 調査結果による分析

調査対象地域 666「両側町」（行政単位の「町」ではなく、通りを挟んだ両側を一つの単位とした）で鬼門除け総数 1,098 を確認することができた。

	角欠け	四角	植栽 (南天)	植栽 (柗)	植木鉢 (南天)	植木鉢 (柗)	植木鉢 (南天+柗)	その他	合計
民家 (木造)	7	64	24	14	144	12	5	43	313
民家 (ビル)	7	79	40	10	68	4	1	32	241
マンション	1	38	22	11	20	0	0	19	111
事務所 (木造)	0	8	2	1	6	1	0	3	21
事務所 (ビル)	3	72	26	23	25	2	1	32	184
店舗 (木造)	3	16	7	2	42	3	1	24	98
店舗 (ビル)	3	35	3	6	26	2	0	29	104
寺社	1	2	0	1	0	0	0	0	4
その他	0	0	2	1	0	0	0	0	3
駐車場	1	9	6	0	1	0	0	2	19
	26	323	132	69	332	24	8	184	1098

図-1 形状、設置主体によるクロス集計 (筆者作成)

① 形状による分類

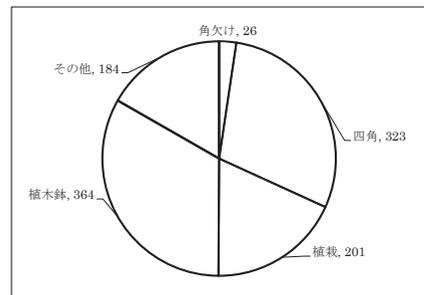
植木鉢：364 (南天 332・柗 24・その他)

四角で囲む：323

植栽：201 (南天 132・柗 69)

角欠け：26

その他：184



・形状では鬼門除けに南天の植木鉢を置いているのが30%あり、敷地の角を四角く囲っているのが29%と次に多かった。

・前掲の辞典類に記載されているような梅、桃、梨、槐の植栽は殆ど見るこ

とができなかった。稲荷の祠はビルの敷地内に1件だけ見ることができた。

② 設置主体による分類

個人宅：554（木造 313・ビル 241）、

店舗：202（木造 98・ビル 104）、

事務所：205（木造 21・ビル 184）、

マンション：111

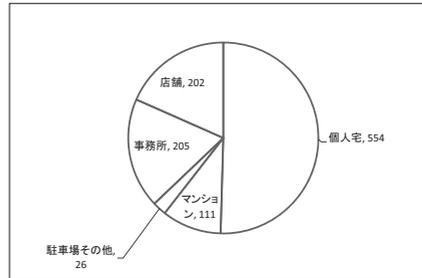
駐車場：19

寺社・その他：7

・設置主体としては個人宅が半数を

占めた。

・木造建築 432 に対してビル等のコンクリート建築が 640 存在した。



(2) 設置理由による考察

現在までの調査によれば設置者の多くは、日常生活の中で鬼門を意識して暮らしており、その中で鬼門除けを施すことは親からの言い伝えを含めて当然のことと捉えていると推察できる。マンションや事務所の設計を数多く手がけた一級建築士にヒアリングした結果によれば、「鬼門のことは知識としては知っているが、施主が言いたさない限りこちらからは勧めない」と述べていた。建築学的には鬼門が意識されていない実態もあり、施主（オーナー）の意向に左右されると推察できる。一方で建売住宅を施工販売している会社への調査では、誰の指示と云うこともなく、ごく当たり前のよう施工しているという回答があった。また、新築住宅に鬼門除けを施工した工務店に確認したところ、京都の場合鬼門を気にする施主が多く、設計段階で確認しているとの回答を得られた。

ただしサンプル数が少なく、マンションなど引き続き調査が必要である。

(3) 京都に多い理由

学術的には鬼門除けが研究対象となっていないが、現在でも京都の町中に新設も含めて多く存在するのは、次の理由からと推察する。

- ① 調査した田の字地区は住民の移動が比較的少ない地域が多く、昔からの風習を踏襲していた。
- ② ①とも関連するが、第2次世界大戦による戦火を受けなかったため、鬼門除けを設置した民家が数多く現存していた。一方で、蛤御門の変で大半が焼失しているので、新設されたとしても明治以降である。
- ③ 京都は碁盤の目状の町並であり、日常生活の中で方角を意識しやすい。
- ④ 田の字地区の外側である上賀茂や東山、伏見、山科でも鬼門除けを見ることができる。これは、大正・昭和初期に田の字地区の外側が住宅地として開発された際に、田の字地区の風習をまねた、もしくは田の字地区から移り住んだ人が旧来の風習を踏襲したからとも考えることができる。
- ⑤ 京都には古い習わしが今でも数多く残っていて（例えば、八のつく日はあらめを食べるなど決まった日に決まった物を食べるや、火要要慎のお札や鍾馗さんなど）、人々はそれらに囲まれて生きている。鬼門や鬼門除けの考え方もそれらと同じように、言い伝え、伝統になっているのかもしれない。

(4) 他都市の例

今回の調査では、他都市の例を調べることはできなかった。江戸時代に家相判断が普及し、「大坂の町中でも、鬼門除けのために丑寅の角を削ることが行われている」と文献⁽⁴⁾に記述があるように、京都だけで流行したことはないようである。他府県在住者に簡単なアンケート調査をした結果では、ほとんどの人が鬼門という言葉を知っていたが、それは「何となく聞いたことがある」というレベルで、家を新築するときに意識はしたが、その後の生活に根付いている人は少なかった。中には南天を植えて鬼門除けをしている人も

いれば、方位・方角など気にしたことが無いという合理的な人もいた。東京で明治初年から続く老舗の主人に話を聞いたところ、家を建てる時には鬼門を意識したが、その時だけであり、鬼門除けという発想は持っていなかった。

他都市の実例を明らかにして、京都との比較を探ることが残された課題である。

注

- (1) 『月刊京都 2013年2月号「鬼の正体、鬼門の謎」』
- (2) 「平安城東西南北町並之図」(江戸初期) 「三条油小路西側・東側町並絵巻」(1820年) 「新町通百足屋町並図絵」(江戸後期) 「六条御境内絵図」他
- (3) 「田の字地区」とは俗称であり、定見はない。一般的には碁盤の目と呼ばれる京都市内中心部のうち、御池通、五条通、堀川通、河原町通に囲まれた地域を指すことが多い。今回の調査では、丸太町通、五条通、堀川通、寺町通に囲まれた東西1.5km、南北2.25kmの区域を悉皆調査した。
- (4) 東牖子(1801)